２００９年度　キリストの教会春季合同礼拝

配布資料　『茨城キリスト教学園の精神史』

常陸太田キリストの教会　　繁國　良明

春季合同礼拝の第１回実行委員会で、午後のプログラムとして、このたび茨城キリスト教学園に建てられた「学園記念館の見学」が加えられました。そこで、昨年の１１月、茨城キリスト教学園創立６０周年記念礼拝で私が教職員を対象に話した「茨城キリスト教学園の精神史」の資料を、合同礼拝当日の参加者に配布してはということになりましたので、少し手を加えて準備しました。

—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—＊—

２００８年１１月１４日　　茨城キリスト教学園創立６０周年記念　礼拝説教

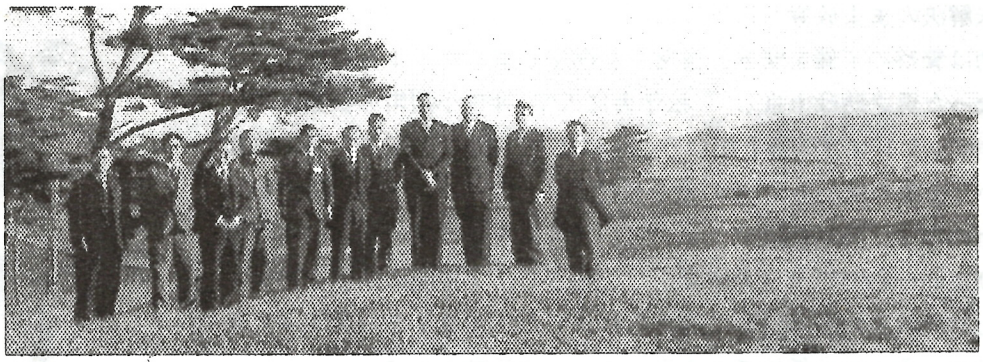
『茨城キリスト教学園の精神史』

繁國　良明

聖書

「私は植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくれるのは神である。だから、植える者も水を注ぐ者も取るに足らない。大事なのは成長させて下さる神のみである。」

Ｉコリント３：６～８



1947年11月16日、マックミラン博士歓迎会が日立製作所厚生園大甕ゴルフ場にて行われた。200名程度の出席があったが、写真は日立グループと太田グループの主な人達と宣教師。左から

江原皆介、菊池鉄治、繁國良八、滝沢　馨、森　禎、岡正一、平塚隆、マックミラン、ビックスラー、ファックスＪＲ、浅野春三

依頼されたテーマは「学園創設の頃と建学の精神」でしたが、私の話では精神的な面を強調したいと思いますので、「学園の精神史」とでも言った方が良いのかもしれません。敗戦直後の廃墟の中で、多くの創設者たちは何に動かされ、植えたり、水を注いだりして、この大事業に関わったのでしょうか。

2　三つの源流

そうです、この人々は異口同音に、何らかの形で「イエス様の世界」に触れ、人生観を変えられた人々でした。学園の創設にかかわった三つの源流、即ち、日立製作所多賀工場の聖書研究グループの浅野春三らと、多賀高専教職員聖書研究グループの滝沢薫、岡正一ら、そして、３つめの、戦前から久慈川に沿って伝道していたキリストの教会のクリスチャンのグループです。そのうち、私が話そうとしている人々は、三番目の久慈川に沿って伝道していた人々に限られるので、或いは一方的な見方と聞こえるかもしれません。私は出来るだけ客観的に話そうと思いますが、それでも、私の知識は一部分であり、経験も少ないのです。

「主がどんなに大きなことをして下さったか、また、どんなにあわれんで下さったか。それを知らせなさい。」（マルコ５章１９節）とありますように、主が何時、何処で、誰を選び、それらの人を通して、どんな偉大なことをして下さったか、順序よく、お伝え出来たら幸いです。

3「復讐の鬼」から「敵を愛せ」の人生観を得た平塚勇之助

先ずご紹介したい人は平塚勇之助です。勇之助は１８７３（明治６）年、那珂郡塩田村（現、常陸大宮市）長沢に、この地方の名医の長男として生れました。１８８５年夏、勇之助が１２歳の時、父、長益が強盗によって殺害され、犯人は逃走、事件は未解決のまま放置されました。

勇之助は警察の不備を嘆き、復讐心を燃やしました。１８９３年、２０歳になった勇之助は上京し、二松学舎に入学、神田小川町の伝道所で、Ｊ・Ｍ・マッケレブ宣教師と出会うことにより、「目には目を、歯には歯を」という復讐の鬼から、「汝の敵を愛せよ」とのキリスト教の価値観へ導かれたのです。勇之助はマッケレブから洗礼を受けましたが、更に聖書を学びたい一心でアメリカ留学をこころざし、７年間の留学を終えて帰国。上富坂教会に牧師として迎えられました。１９１５（大正４）年のことです。勇之助は任地である東京での伝道活動と共に、故郷伝道、それも家族の伝道を心がけ、帰省するたびに多くの近隣の人々を集めては伝道しました。

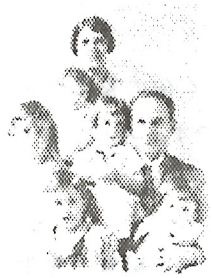
平塚勇之助（『慈川余香』より）

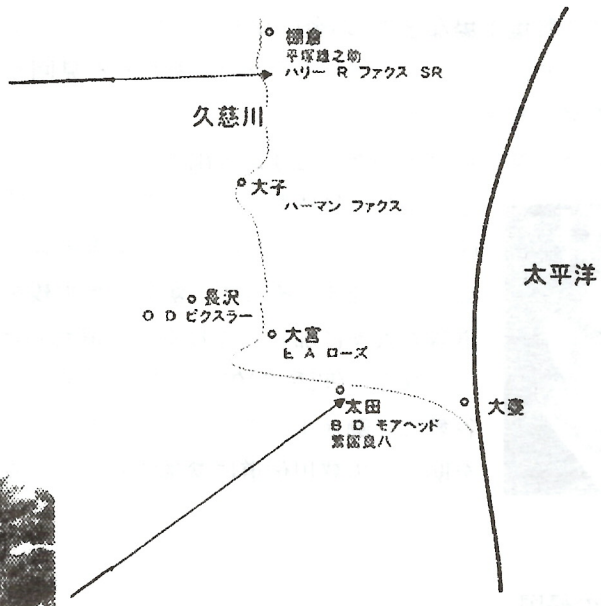
4　久慈川沿いに伝道した宣教師たち

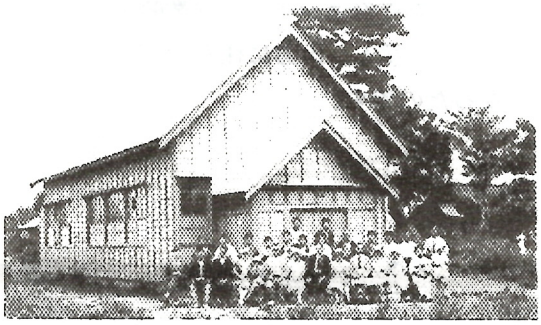
１９２０（大正９）年前後、若いアメリカ人宣教師達が日本伝道に来るようになりました。東京上富坂教会の牧師、平塚勇之助は彼等に自分の故郷を紹介し、１９１９年にはＯ・Ｄ・ビックスラーが長沢に、同年、Ｅ・Ａ・ローズは大宮町に、ハリー・Ｒ・ファックス・ＳＲは棚倉町に、その双子の弟ハーマン・

ファックスは大子町に住んで伝道しました。１９２５（昭和元）年にＢ・Ｄ・モアヘッドが来ると彼は太田町を選び、増井の丘に宣教師館を建て、その南隣にキング・バイブルスクール（伝道学院）の建物を建て、町には教会堂を建てました。彼らの目標は久慈川に沿って上流から河口まで左側の久慈郡と、右側の那珂郡に福音の種を播くことでした。彼らに協力した日本人の伝道者たちは海老根龍視、坏進、平塚真、繁國良八、茅根栄一郎、堀口澄明、菊池政一などでした。

Ｈ・Ｒ・ファックスＳＲ家族







太田教会最初の礼拝堂（1934 年）

5　田舎伝道を目指したＯ・Ｄ・ビックスラー

１９１８（大正７）年４月、ビックスラーはアンナと結婚、日本伝道の召命を強く感じ、日本地図をひろげ、友人に抱負を語っています。「東京には多くの宣教師が働くであろう。私は東京から遠く離れた、**いまだに福音の語られていない山村で伝道したい。**」と言いながら、地図の北の方を指差した。その場所こそ、後年、平塚勇之助に勧められた茨城県だったのです。

１９１９年１月１７日、横浜に第一歩を記したビックスラーは、日本語の学習をしながらマッケレブの雑司が谷学院を手伝いました。彼は単身山方町に下宿し、毎日長沢まで通ってアメリカから取り寄せたプレハブ住宅を日本人の大工と共同で建て、１９２２年２月にアンナ夫人を連れて移転、希望通りの田舎暮らしを始めました。近所の人々は弁当持参で、この若い米人夫婦を観察し、上野のパンダのように見物しました。ビックスラーはたちまち茨城弁を話すようになり、アンナ夫人もビスケットを焼いたり、アイスクリームを作ったりして村人に接し、急速に福音の輪を広げたのです。このことは、後年、ビックスラーに「私の口よりも、アンナの行いがどれほど福音を伝えたか知れません」と言わせました。

Ｏ・Ｄ・ビックスラー

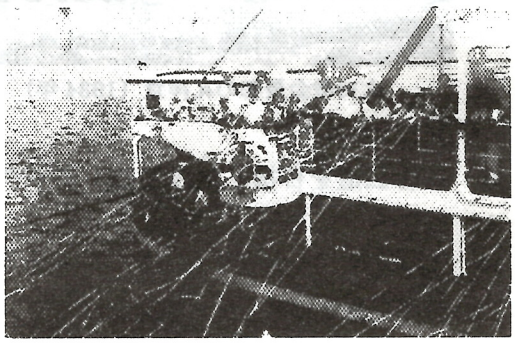
6「一攫千金・故郷に錦」から「キリストの僕」に変えられ、人に仕えた繁國良八

１９００（明治３３）年、繁國良八は広島県比婆郡（現、庄原市）に生れました。姉と二人の妹と弟がありました。当時の中国山地の貧農家庭は生活が苦しく、父の寅一郎は、１０歳の良八を連れて、娘婿が成功していた京城（現、ソウル）に出稼ぎに行きました。しかし、寅一郎は旅先で病死し、良八は１２歳で単身帰国せざるを得ませんでした。１９２０年、良八は、アメリカに移住した叔父夫妻を頼って渡米しました。良八は「一攫千金、故郷に錦を飾る」目的でしたから、叔父と同じ庭師ばかりでなく、鉄道の重労働や運送や製塩工場などで、お金になることなら何でもやったようです。ある所で芝刈りをしていた時、バーンという音がしました。何だろう？と、あたりを見回しても何の異常もありません。ところが自分のネクタイを見て驚きました。ネクタイには穴があいているのです。ネクタイは二重になっていましたが、その両方に弾は突き抜けていたのです。寸出のところで助かったのです。この出来事がきっかけで、聖書を学びたい気持ちになり、太平洋神学校に入りました。日系人を対象にした伝道者養成学校でした。良八はここで聖書地理学者の馬場嘉一先生や、新里貫一牧師などに出会ったのです。そして、新しい死生観を身につけた良八は、羅府（ロサンゼルス）伝道隊の人々に加わって日系人伝道もしたようです。

１９２７(昭和２)年、良八は帰国すると、東京のマッケレブ宣教師を訪ね、雑司が谷教会で働きました。そして、茨城の伝道を応援し、山方に住んでビックスラー先生を助け、久慈川伝道に参加することになったのです。

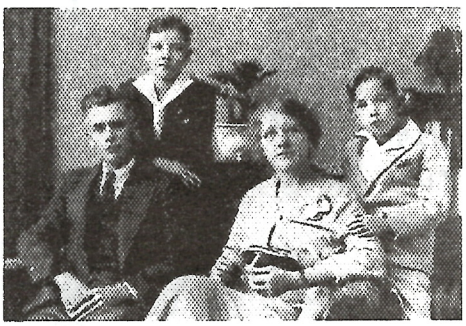
7　宣教師の帰国

ビックスラーやファックス・SR などが久慈川沿い伝道をした平和な時代は、大正末期から昭和５年までの１０年間ほどでした。それからは、昭和６年の満州事変から１５年戦争に入って行くのです。宣教師は帰国し、１９４０年頃にはキング・バイブルスクールも閉鎖。学生たちは徴兵されました。



ハリー・ファックス・ＳＲ家族帰国→

１９３５年８月２２日、龍田丸（横浜）



←大宮に住んだローズ家族と

太田に住んだモアヘッド夫妻→

8　戦争中

アメリカではハリー・ファックス・SRは、シカゴ市のコーネル・アヴェニュー教会の伝道者。ビックスラーも同じシカゴ市のブルックフィールド教会の伝道者だったので互いに連絡を取り合い、**戦後の日本に何が最も必要であるか話し合っていました。**

9　ハリー・ファックス・ＳＲ　戦争被害調査団の一員として来日

Ｈ・Ｒ・ファックス　ＳＲ

１９４５(昭和２０)年９月、ハリー・ファックス・SR はアメリカ政府の戦争被害状況調査団の一員として来日し、その帰路、太田町に繁國良八を訪れ、「戦争で荒廃した日本に何が最も必要であるか」を話し合い、**衣類も食料も住宅も不足している状況の中で、日本人が再び、自ら戦争という過ちを犯すことの無いように、平和国家の建設のため、キリストの愛に基づく学校を建設することこそ必要である**という言葉を聞いて感銘し、帰国しました。

10　ビックスラー代表宣教師として再来日

GHQのマッカーサーは、戦争直後の日本に**宣教師の入国を制限（１９４７年１０月まで）して、各派代表１名に限り認めました。**ハリー・ファックス・SR は，代表としてビックスラーこそ適任であると推薦しました。

１９４６年１２月１６日、ビックスラーがキリストの教会代表宣教師として、他教派の代表２０名と共に救援物資を携えて、四日市港に入港しました。ビックスラーにとって、実に８年ぶりの変わり果てた日本でした。早速、**太田町の繁國を訪ね、学校構想を話し合い、候補地探しを開始しました。**

11　多賀学園との合体

浅野春三　　岡　正一

１９４７年１月～２月、浅野春三らの多賀学園グループと繁國良八との接触がありました。多賀学園構想とは２月１１日に多賀教会献堂式があるので、「教会の運営を協力して欲しい」というものでした。会堂を利用して幼稚園、英語の夜学校も始めようとしているとのことでした。

12　「シオンの由来」

初期の理事の一人であるハリー・ファックス・JRは、アメリカの教会宛の手紙（１９４９年４月）で、イエスの唯一の成長記録であるルカによる福音書２章５２節を引用し、**「シオンの由来」を紹介しています。**「イエスはますます知恵が加わり①、背丈も伸び②、そして、神と③　人から愛された④。」（ルカ２・５２）

「『シオン』とは日本語で『４つの恵み』を意味します。日本の青年たちに多方面に及ぶキリスト教教育を施すことにより、**ルカ２章５２節にあるように、知的にも、身体的にも、精神的にも、社会的にも、成長するようにと、この学園に名づけられました。**」（「キリストを茨城へ」37ページ）　私も、父良八が「この４つの恵みは、即ち４つの恩であり、四恩（シオン）である」と言っていたことを記憶しています。

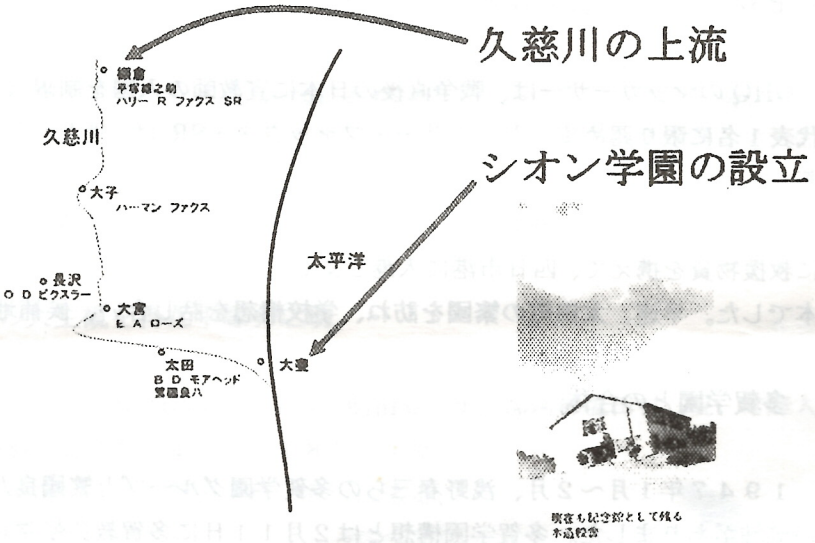
13　シオン学園設立

１９４７年１１月１６日、礼拝の後、マックミランの歓迎会がありました。ハリー・ファックス・JR が、その時の状況を次のように言っています。「マックミラン兄がお礼の演説を述べ、ビックスラー兄が日本語に通訳しました。日本人の聴衆全員も深く心を動かされたのです。それというのも、マックミラン兄の言葉が余す所なく日本語に訳されたからであり、その演説というのは、私が今まで聞いた演説のうちで最も偉大なものの一つで、気高い精神に満ちていました。彼がその講演の中で、『シオン学園設立』について語ったところ、日立製作所は大みかの土地を提供すると申し出てくれました。」

E・W・マックミラン

14　久慈川沿い伝道と学園

戦前、約２０年にわたってなされた久慈川沿いの伝道で播かれた種が、その河口である大みかに学園創設となって実を結び、６０年を経て今日があるのを見る時、神の知恵、神のご配慮をしみじみと思わされるものです。



私は、学生として５年間、教職員として３２年間、ことに、その最後の２０年間、久慈川の中流の町から通勤して、まことにこの歴史を追体験している思いでした。

15　結び

以上、大雑把に平塚、ビックスラー、繁國といった３人の人物を通して、久慈川伝道の歴史とその結果として、河口である大みかに本学園が設立されたことの流れをお話ししました。この思い、この精神は今でも本学園のコアとして生き続けています。時代が変わり、そこにいる人間が変わって行く中で、普遍の真理を強く保ち、これからも世界に貢献する学園として発展し続けて欲しいと願っております。

—＊—

以上、拙い文章ですがみなさまが「学園記念館」を見学する際の参考になり、また、神様がこの地になしてくださっている御業の数々を感じていただければ幸いです。